第三講「論理」を読む　50分

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

A推論の妥当性は真理値のコンビネーションの不可能性として理解される。推論が妥当だということは、その推論の仮定が真で結論が偽ということはありえない、つまり不可能だ、ということだった。こう説明される妥当性概念には、問題が二つある。「不可能とは何か」という問題と、「真とか偽とかいうのはどういうことか」という問題である。この二つの問題に満足のいく答えをあたえることがいかにむずかしいかを肌で感じたあと、演繹（えんえき）という概念に内在する「実効的決定可能性」という概念が、論理学におけるかぎり、そのような問題に直面する必要性を取り除いてくれる、ということをみよう。まず、不可能性からはじめる。

B これこれという事態が不可能だということは、これこれという事態が現実ではないということ以上のことである。不可能ならば現実ではないが、現実ではないからといって不可能だということにはならない。では、現実ではない事態のうち、どれが可能でどれが不可能なのか。例からはじめる

のがいいだろう。

（1）わたしは金髪である。

（2）あなたは、わたしとランチをしている。

わたしは金髪ではないし、あなたはわたしとランチをしているのではない。すなわち、（1）と（2）がいいあらわしている事態は現実ではない。にもかかわらず、わたしが金髪だということは可能だし、あなたがわたしとランチをしているということも可能である。髪を金色に染めることは可能だし、同時に存在する二人が一緒になってランチをすることは可能だからだ。ここで重要なのは、可能性を蓋然性（ア）と混同してはならないということである。わたしが髪を金色に染めていたというのは可能だが、ありそうなことではない。確率でいえば、ゼロではないが高くもない。９％くらいだろう。あなたとわたしがいまランチをしていたという可能性も、ゼロではないが、かなり低い。大事なのは、いくら低い可能性でも、ゼロでなければ立派に可能性として成り立っているということである。「ｐは現実ではないが可能だ」は「ｐは現実ではないが、ｐだという可能性はゼロではない」ということだと思えばいい。いい換えれば、「現実にはｐではない

が、ｐだということは不可能（可能性ゼロ）ではない」ということだ。

「可能世界」という概念がここで有用になる、ということはあきらかである。「ｐは現実だ」は「現実世界でｐだ」と理解され、「ｐは可能だ」は「少なくとも一つの可能世界でｐだ」と理解される。現実世界はあきらかに可能世界の一つなので、ｐが現実ならばｐは可能だということはいうまでもない。

不可能性は可能性の否定なので、ある事態が不可能だということは、いかなる可能世界でもその事態はないということである。これを妥当性の定義に当てはめると、こうなる。

> 推論が妥当だということは、その推論の仮定がすべて真でかつ結論が偽であるということが、いかなる可能世界においてもないということだ。

妥当性のこの分析は直感的には非常にわかりやすいが、「可能世界」という概念に依存しているので、その良し悪しは「可能世界」という概念の良し悪しに依存している。では、「可能世界」という概念はどういうふうに理解すればいいのだろうか。まず第一にあきらかなのは、「可能」と「世

界」に分けて理解するのはだめだということである。なぜなら、「可能世界」という概念を理解するためにまず「可能」という概念を理解せねばならないとしたら、C前者で後者を（悪循環なしに）定義することはできなくなるからである。では、「可能」という概念を使わずに「可能世界」という概念をどう理解すればいいのだろうか。

　こういうのはどうだろう。まず現実世界からはじめる。現実世界は、あなたやわたし、テーブルや椅子、地球表面に位置するその他諸々の物体、太陽系、それをふくむ銀河系、その他無数の天体、また（身体を持たない）デカルト的思考主体のような純粋心的実体があるならそれら全部、さらに（時空を超えた）プラトン的イデアなど抽象物があるならそれらも、すべてふくめた大きな全体として把握することができる。そのような全体を現実世界と同一視するならば、非現実可能世界も同じ種類の全体だと理解すればいい。現実世界を構成する部分ではなく、別のものを部分として持つ全体なのである。あなたやわたし、地球や銀河系は、現実世界を構成する部分なので、ほかの可能世界の部分ではない。現実世界にない人物や天体が、非現実可能世界を構成する。もちろん、人間や天体がない可能世界もあるし、わたしたちには想像もできないような種類の実体を構成要素として持つ可能世界もあるだろう。可能世界のこのような説明は、現実世界か

らはじめて、それを一般化しているだけなので、現実を超える可能性の概念を必要としない。よって、「仮定がすべて真でかつ結論が偽であるということが、いかなる可能世界においてもない」という妥当性の定義で言及されている可能世界を、このように理解すれば、妥当性の定義が悪循環なしに把握できる。めでたし、めでたし。

　というわけにはいかない。可能世界とは何かについてのこの理論には、残念ながら基本的な問題があるのだ。そもそも可能世界を引き合いに出すのは、非現実だが可能な事態が成り立っている場を提供するためだった。あなたがわたしとランチをしているというような、現実にない事態を擁するのが可能世界の役目だったはずである。だが、目下の理論によると、あなたとわたしは現実世界の部分であって、ほかのいかなる可能世界の部分でもない。とすると、現実世界以外の可能世界には、あなたとわたしは存在しないということになる。存在しなければ、ランチをすることなどできない。よって、あなたとわたしがランチをする可能世界はない。ゆえに、あなたとわたしがランチをするのは不可能だということになる。ランチは一例にすぎないので、この議論を一般化すると、現実の個体についての現実にない事態はすべて不可能だ、という結論が出てしまう。実のある哲学的な議論によってこの結論を擁護しようとする試みがあるのならば、それ

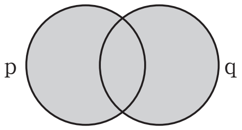
はあっぱれだが、単に「可能だ」の定義からこの結論が自動的に転がり落ちる、という主張は受け入れがたい。D「現実は必然だ」という立場は、単に言葉の定義によって正当化されるべきものではない。言葉の意味をしっかり把握している論者たちのあいだで論争の的になるトピックなのであるから。

　この問題は、かなりやっかいな問題で、解決策がないわけではないが、それを受け入れると別の問題が起き、その問題を解こうとすると、さらなる問題がイ芋ヅル式に生じて混迷状態におちいる危険性が高い。多くの哲学者は分析をあきらめている。「可能だ」は原初的な概念であり、より基礎的な概念で定義することなどできない、という態度をとっているのである。そして、「妥当だ」を「仮定がすべて真でかつ結論が偽であるということが可能でない」と定義するかぎり、Eこの態度は妥当性の概念をミステリアスにするだけである。

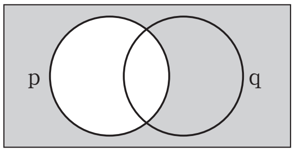
（八木沢敬『「論理」を分析する』による。出題の都合上、本文の一部を改変している。）

問一　破線部ア「蓋然（がいぜん）性」、イ「芋ヅル式」の意味をそれぞれ書きなさい。

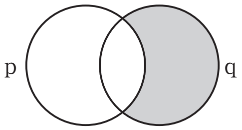
問二　Aについて、筆者は「ヴェン図」という図を用いて推論の妥当性を以下の枠線内のように説明している。枠線内の記述にならい、左図の(1)(2)に適切なことばを入れて、推論を完成させなさい。



「p または q」

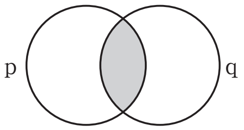


「　(1)　」

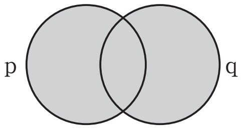


「ゆえに(2)」

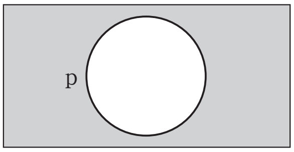
図



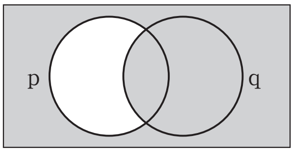
「p かつ q」



「p または q」



「p でない」



「p ならば q」

　ｐだという状況を左のｐの円であらわし、ｑだという状況を右のｑの円であらわしている。なので、ｐかつｑだという状況は、ｐの円とｑの円の交わった凸レンズ形の部分によってあらわされることになるのである。

　ｐまたはｑだという状況は、ｐだという状況があればあり、ｑだという状況があればあるので、ｐの円とｑの円の両方によってあらわされている。

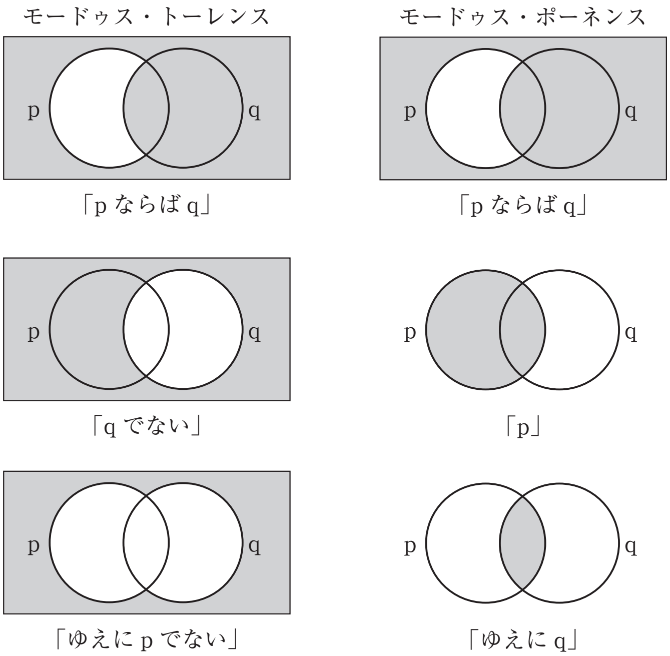
　ｐでないという状況は、ｐだという状況を除く状況なので、ｐの円の外の部分によってあらわされるのである。

　ｐならばｑだということは、ｐの円の中でｑの円にふくまれない部分はない、ということなので、ｐの円の内部の凸レンズ形以外の部分が排除される。つまり、「ｐかつ、ｑではない」ということはない、すなわち、「ｐでないか、またはｑである」と同じことになる。ｐの円とｑの円の外側の長方形部分がふくまれるのは、それが「ｐでない」をあらわす部分だからであり、ｑの円がふくまれるのは「ｑである」をあらわすからにほかならない。

　では、仮言（「ｐならばｑ」）をふくむ二つの妥当な推論、モードゥス・ポーネンス（「ｐならばｑである」「ｐである」「ゆえにｑである」）とモードゥス・トーレンス（「ｐならばｑである」「ｑでない」「ゆえにｐでない」）をヴェン図に描いてみよう。

「ｐならばｑ」でｐの円の凸レンズ形以外の部分が排除され、「ｐ」でｐの円以外が排除されるので、凸レンズ形の部分だけが残るのだが、それはｑの円の一部でもある。ゆえに「ｑ」という結論が出るのである。

「pならばq」でpの円の凸レンズ形以外の部分が排除され、「qでない」で凸レンズ形部分をふくめたqの円が排除されるので、pの円とqの円がともに完全に排除される。ゆえに、「pでない」という結論が出るのである。



問三　Bについて、このように言えるのはなぜか、文中の「以上」という表現に注意して説明しなさい。

問四　Cについて、このように言えるのはなぜか、説明しなさい。

問五　Dについて、ほぼ同じ内容を表現している箇所を本文中から**二十五字**で抜き出しなさい。

問六　Eについて、このように言えるのはなぜか、説明しなさい。

問一

ア	イ

問二

(1)

(2)

問三

問四

問五

問六

第三講 「論理」を読む　解答

問一

ア	イ
その事柄が実際に起こるか否か、真であるか否かの、確実性の度合。	蔓をたぐると芋が次々に出てくるように、多くの出来事が関連して続くこと。

問二

(1) pでない

(2) q

問三

これこれという事態が不可能だということは、その事態が現実ではないというだけでなく、いかなる可能世界でもその事態はないということだから。

問四

「可能世界」という概念を理解するときに、まず「可能」という概念を理解し、かつ「世界」という概念を理解するとした場合、「可能世界」でない「可能」が存在することになってしまうから。

問五

pが現実ならばpは可能だということはいうまでもない

問六

「妥当だ」とは「仮定がすべて真でかつ結論が偽であるということが可能でない」と定義する際の「可能」は、原初的な概念であり、より基礎的な概念で定義することなどできないという態度であるから。